

群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

# Center News

Center for Cooperative Research and Development on School Education  
Faculty of Education, Gunma University

第6号

(2018年3月31日発行)



「学び合う仲間による教員研修リレー講座」における現職教員の真剣なまなざし

## 目次

- 2 ● 巻頭言：地域と教育学部を結ぶ役割を担って
- 3 ● 寄稿：「学び合う仲間による教員研修リレー講座」に寄せて
- 4 ● 寄稿：群馬大学教育実践研究のオープンアクセスとその効果
- 5 ● 報告：個別学習相談事業
- 6 ● 報告：学校経営サロン
- 7 ● 報告：附属幼稚園・附属小学校から
- 8 ● 報告：附属中学校・附属特別支援学校から
- 9 ● 報告：今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的なFD活動の推進
- 10 ● 報告：子ども総合サポートセンター事業概要
- 11 ● 報告：附属小学校における取組～提案授業・授業研究会～
- 12 ● 報告：現職教員の成長を促す温かな学び合いの場
- 13 ● 報告：教育臨床心理部門の取組
- 14 ● 報告：群馬大学教育実践研究35号発行のお知らせ
- 15 ● 報告：センター協議会・資料室利用状況
- 16 ● 報告：次年度へ向けた取組の紹介

## ● 巻頭言

## 地域と教育学部を結ぶ役割を担って

附属学校教育臨床総合センター長 上原景子

群馬県教育委員会との連携に関わる協議会で群馬大学教育学部が「地域とともに行う教員養成」という視点を取り入れ、「学校現場往還型カリキュラム」を開始したのは、今から10年以上前のことです。このカリキュラムは、1年次の教育現場体験学習、2年次の授業実践基礎学習、3年次の本実習、4年次の教職実践インターンシップを体系的に実施するもので、全国でも非常に特徴あるカリキュラムとして注目を浴びています。「学校現場往還型」という名前のおり、学生たちは、学校現場を「教師」という視点で体験的に学んでは、大学での学修することを段階的に繰り返し、教師としての素地を築いていきます。このプログラムが先進的な教員養成プログラムとして高い評価を受けているのは、県市町村教育委員会ならびに実習に協力してくださる数多くの学校のご理解とご協力の賜物です。

道を歩くと、ランドセルを背負ったり自転車を一生懸命漕いだりして学校に向かう児童生徒の姿が、「一年間頑張ってきたよ」というかのように感じられます。寒い日も暑い日も毎日学校で先生方が一人ひとりを支えて来られたことが伝わってくるような気がします。大学では、卒業していく学生たちを送る準備に加えて、そろそろ新学期の話が始まりました。教育実習で貴重な体験をさせていただき、勤務校がどこになるのかを楽しみにして、4月からの勤務に胸を躍らせている学生たち、今度は自分が実習を行わせていただく番だと早くも緊張している学生たち、その一人ひとりがたくさんの学びをさせていただいております。

私たち附属学校教育臨床総合センターの主な使命は、教育実践に関する臨床の学の創出と研究、そしてその成果を踏まえた教育、研修、支援を行うことです。そのため、私たちは、大学と学校現場との協働的・実践的な研究を通して、今日の学校教育課題の解決に資する実践的指針を見出すことを目指して、教員養成と地域の教育や学校現場への貢献を行っています。附属学校教育臨床総合センターは、「教育実習・実践開発部門」「国際理解教育部門」「教育臨床心理部門」の3部門と「子ども総合サポートセンター」「教員養成FDセンター」「学部・附属学校共同研究センター」の3センターから構成されています。どの部門もどのセンターも学校現場と密接に関わり、多くを学ばせていただくことで、教育への貢献と還元ができると考えております。

私たちセンター職員は、これからも地域と群馬大学教育学部を結ぶ役割を一層効果的に担って参りますので、引き続きご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

## ● 寄稿

## 「学び合う仲間による教員研修リレー講座」に寄せて

埼玉県小鹿野町立小鹿野中学校 教諭 加藤悦子

埼玉県の中学校で勤務する50代の教諭です。毎年「学び合う仲間による教員研修リレー講座」のHPが新しくなると、タイムリーに設定された講座の内容にワクワクしながら、学校行事や部活動の大会等が重ならない日をチェックしています。私の住む秩父からは片道2時間程度ですが、遠くは富山県から参加の校長先生に、直面する学校の統廃合についての課題に共感していただいたこともありました。他県の私たちも、本県の先生方と変わらぬ機会を頂け、群馬県には感謝と親しみを感じています。

私たちは群馬大学の高い見識とリーダーシップのもとに、諸先生方が命がけでされた教育研究に触れることができるのです。また、若い教師や教師を目指す方にとっては、日々の生々しい現場に生きる参加者同士の情報交換は教育臨床の事例として参考になり、後押しされたり、身構えをつくるのに大いに役立つと思われま

す。教師自身の、「主体的・対話的で深い学び」の生まれるこの講座は、参加する人の力量に応じて、求めるものを与えてくれます。明日の授業の方法論から、教師として生きる自分を対象化して更新するまで、参加者の求めの深さにより、どこまでも豊かな学びの準備をされているのです。「暗黙知」「身体性」「同僚性」等々、先生方の使う言葉の一つ一つの意味を理解し受け止めようとするとき、教職生活で身に付けてしまった垢を脱ぎ捨てることができるでしょう。日々の仕事で膠着した思考は、思いもよらない視点の発見や、万障繰り合わせて参加された皆さんとの共感や児童生徒たちを大切に思う気持ちの共有で、緩やかにほぐされていきます。

「やっぱりそうだよね」と、異なる意見の中で薄れそうになっていた大切な事を確認したり、「なるほど!」と、焦点化されていなかった問題が明らかになり、それまでの薄もやがサーッと晴れてゆくような気分になれたり、「この先生も、よくやってるなあ」と、自分もまだまだ頑張れそうな力をもらえたり、毎回この場に身を置く事により、新しい自分になれると思っています。頂戴した資料を勤務校で回覧したり、講座のポスターを職員室に掲示したりしていると、現代的学校教育課題として取りあげられている内容が話題となることもあります。

私は密かに、この講座のことを、清らかに咲く山野草のような輝きを放つ希少な講座、ととらえています。私たちは「先生」として生徒と向き合うために、日々学び続けることが不可欠です。教員免許更新講習や年次研修等の官制の研修も大切な学びの場と思います。しかし、全く主体的に、学びたい人が集まってくるこの講座に、ゆとりを持って最高水準の英知が答えてくれるという贅沢を、他に見つけることは困難です。

恩恵に預かるばかりで恐縮しつつ、今後とも私たちに学びの契機をいただけたらと切望しています。

## ● 寄稿

## 群馬大学教育実践研究のオープンアクセスとその効果

紀要編集委員長 田中麻里

みなさまのお手元に、学校教育臨床総合センター紀要「教育実践研究」第35号は届きましたでしょうか。

CD-ROMのため、なかなか実感していただくことが難しいかもしれませんが、今号は論文数、ページ数、著者数が昨年の約1.5倍となっております。昨年は24本の論文が掲載されていましたが、今年は37本と約1.5倍に増えており、ページ数も約350ページと昨年より100ページ以上増えております。増えたのは頁数だけではありません。昨年はのべ68人の論文が掲載されていましたが、今年は述べ104人の論文を収録しております。さまざまな視点から書かれた論文が多数掲載されておりますので、是非、全体に目を通していただき、気になった論文をお読みいただければと思います。

さて、この「教育実践研究」ですが、群馬県地域共同リポジトリ (AKAGI: Academic Knowledge Archives of Gunma Institutes) で公開しております。つまり、インターネットにつながる環境があれば、どんな国や地域からでも論文を閲覧し、ダウンロードできるということです。実際に、どれくらい閲覧されていると思われますか？ 例えば、昨年3月に発行された教育実践研究34号はこれまで1028回、閲覧されています。では、1ヶ月間にどれくらい閲覧されているのでしょうか。今年1月には109回、昨年12月には90回閲覧されています。閲覧上位国は日本 (732)、ついでアメリカ (231)、フランス (24)、イギリス (15) などとなっています。日本語で書かれた論文が中心であるにもかかわらず、海外からも閲覧され読まれています。

では、教育実践研究のなかで、過去1年間で最も閲覧が多かった論文は何でしょうか。月ごとのデータを検索したところ、「アクティブ・ラーニングを取り入れた、図工・美術の鑑賞の授業—「活動」と「教師の手立て」の視点から—」でした。日本語で書かれた論文ですが、2016年3月に発行されてからこれまでの総閲覧数は408、閲覧上位国はアメリカ (228)、つぎに日本 (133)、ドイツ (13) などでした。このように、私たちが書いたものは海を超えて読まれているということを、少し実感していただけたでしょうか。

これらの統計情報も、どなたでもAKAGIのページからご覧いただくことができます。方法は、群馬大学総合情報メディアセンターのHPトップページの左側、「群馬県地域共同リポジトリ (AKAGI)」を選択していただき、つぎに左側「コミュニティ/コレクション」で「教育実践研究」を選択していただき、出てきた画面にある「統計情報」をクリックしていただければご覧いただけます。

群馬大学附属学校教育臨床総合センターは「教育実践研究」を発行しておりますが、群馬大学教育学部からは「群馬大学教育学部紀要」を発行しております。こちらもぜひご覧いただければと思います。群馬大学教育学部では、こうした紀要刊行以外にも、現職教員の方々にご参加いただける長期研修院をはじめ教員研修の機会や講座、教員免許更新講習会、附属学校園での公開講座、学校経営サロンなど、さまざまな取り組みを行っております。また、教員も個々に、多様な実践活動を行っております。みなさま方とより良い教育の実現に向けて一緒に取り組んでいきたいと考えておりますので、どうぞご相談、ご助言などいただけますと幸いです。

35号は、例年より発行を2ヶ月早めたタイトなスケジュールの中で、編集委員の先生方には査読と適切なお助言をいただきました。関戸明子先生、石井基裕先生、林耕史先生、吉田浩之先生、そして岩瀧大樹先生と品川仁美さんには大変感謝申し上げます。また、多くの論文をご投稿いただきました皆様方にも感謝いたします。今後ますます教育実践研究が充実することを願っています。

\* AKAGIとは群馬大学、県内19大学と群馬県立図書館が共同で、教育活動などの成果物や郷土関係の貴重資料などを登録し、インターネットを介して学内外に公開することで社会に貢献することを目的としており、群馬大学図書館が管理をしています。

## ● 報 告

## 個別学習相談事業

教職リーダー講座 深谷達史

「うまい勉強のやり方が分からない…」, 「がんばっているのになかなか成果があがらない…」。このように、勉強について悩みを持つ児童生徒は少なくありません。教育心理学では、学習に悩みを持つ人を対象に、心理学の知見に基づき複数回の個別的な面接を実施することで、学習者としての自立を促す「認知カウンセリング」という活動が行われています。

学校教育臨床総合センターのサポートのもと、2016年度にスタートしたこの事業では、教師を目指す群馬大学教育学部の学生が相談者となって、応募した大学近隣の小中学生に認知カウンセリングを行います。支援の質を高めるため、以下のような3回の研修を実施し、参加した児童生徒の悩みが少しでも解消されるよう学生は研鑽を重ねます。

事前研修 … 0 認知カウンセリングの考え方や具体的な支援方法を学ぶ。

中間研修 … 初期の相談の様子を互いに報告しあい方針を検討する。

事後研修 … 一連の相談の過程と成果を発表し改善点を議論しあう。

認知カウンセリングでは、個別に相談を行うメリットを生かし、悩みの原因を丁寧に診断し、支援を図っていきます。そこでは、単に問題の答えを出すだけでなく、自分で考え方を理解し、うまく学習を進めていくための力を養うよう働きかけます。例えば、問題を解きっぱなしにするのではなく、なぜ間違えたかをポイントとして残しておくなど、効果的な学び方を身に付けることを促します。

こうした取り組みを通じて、参加した児童生徒の学ぶ力を高めることはもちろんのこと、教師を目指す学生が「子どもがどういったつまづきを示しうるのか」、「それをどう解消しうるか」を学び、教師としての資質能力を高めることを企図しています。

これまで群馬大学荒牧キャンパス周辺の小中学校のみを対象に募集を行っていましたが、2018年度からは担当者が別の大学に異動してしまうため、残念ながら本学での募集は停止することとなります。ただ、認知カウンセリングに興味のある方は、インターネットから認知カウンセリングの書籍をご覧いただくことができますので、以下をご参照いただくと幸いです。



市川伸一(編)(1993). 学習を支える認知カウンセリングー心理学と教育の新たな接点ー ブレーン出版

([http://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/book\\_cog-coun.htm](http://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/book_cog-coun.htm))

市川伸一(編)(1998). 認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導 ブレーン出版

([http://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/book\\_cog-coun2.html](http://www.p.u-tokyo.ac.jp/lab/ichikawa/book_cog-coun2.html))

## ● 報 告

# 学校経営サロン

教職リーダー講座 **高 橋 望**

2015年度より、学校経営サロンが始まりました。学校経営サロンとは、現職の先生方と大学教員が、学校経営について自由に語る場のことです。「サロン」と命名した理由は、「研究会」のように堅苦しくない雰囲気の中で、日頃感じていること、考えていることなどを、ざっくばらんに語る場を設けたいという思いがあったからです。日々の教育実践、あるいは実践をしていく中で感じている疑問など、他校の先生方や大学教員と語り合うことで、日々の実践に対するヒントが得られるのではないかと考えています。

今年度は、主に毎月第4水曜日の19:00～20:30に、群馬大学荒牧キャンパスの教育学部附属教育臨床センター内でサロンを開催してきました。ご参加いただいた先生方からの要望を踏まえ、設定された主なテーマは、以下の通りです。

「学校組織とは？」 「学校の勤務環境の在り方」 「今、学校が抱える課題とは？」  
「小規模校における学校経営」 「学校・学年通信の在り方」 「職員室の雰囲気・配置」

平日の夜にもかかわらず、前橋市内だけでなく、高崎、藤岡、渋川、桐生、伊勢崎、吾妻・利根など、県内各地から、そして、50代から初任者まで、幅広い年齢やキャリアの方々にご参加いただきました。「学校経営というとなかなか難しいイメージがあったが、参加したらそんなことは全くなかった」とおっしゃる先生方も多くいらっしゃいました。また、若手の先生方も、最初こそはなかなか発言も見られませんでした。次第に積極的に参加される様子も見られるようになりました。

ある参加者の言葉です。「初めはなかなか難しい内容だと思っていたのですが、各学校でのちょっとした話をうかがっていると、世界が広がるなと感じました。また明日から職場で頑張ろう、と思えるようになれました」と。

先生方が少しでも元気になれるよう、サロンをご活用いただければ幸いです。

## ● 報 告

## 附属幼稚園から

附属幼稚園 西村 竜 哉

今年度は、「幼児の遊びを豊かにする園庭～季節の移ろいとともに変化する幼児の遊びに目を向けて～」を研究主題に、幼児一人一人の遊びを豊かにするために、季節の移りかわりとともに変化する幼児の遊びに着目して、園庭の自然を中心とした環境構成や教師の役割について追究してきました。本研究では、幼児が園庭の自然を中心とした環境にかかわり、教師が“幼児の遊びが豊かになっている”と感じた35の場面を事例として取り上げました。その事例を基に保育カンファレンスを行い、幼児の遊びを豊かにする自然環境について「幼児が自分で採取できたり、自分で加工できたりするもの」「同じものでも異なった質感のもの（土・葉・花など）があること」「幼児が何回でも繰り返し試せるもの」などを見出しました。またカンファレンスの中で幼児が「めざす姿」に向かって行く過程で、自然環境だけでなく次に述べる3つのことも重要であることが見出されました。それは、①遊具や用具などの人工的な環境、②他の幼児の存在、③教師の援助です。自然環境と遊具や用具などの人工的な環境や他の幼児の存在、教師の援助などが相互に影響し合うことによって、幼児の遊びが豊かになっていくことが明らかになりました。そして、この体験（自然・遊具や用具・友達・教師が影響し合った遊び）を幼児が積み重ねていくことで、幼児の遊びがさらに豊かなものになっていくことも、カンファレンスの中で明らかになりました。

指導計画の見直しも行いました。各期が終了する毎に当該学年が修正案を提案し、職員全体で検討しました。また、幼稚園での保育が、小学校の教育へとさらに繋がっていくよう、指導計画の見直しとともに職員全体で具体的に話し合い、保育のどの部分が接続期となっているかを共有しました。

6月・10月には、県内外から288名の参会者を迎え、公開研究会を実施しました。来年度は園舎改築のため公開研究会を実施することはできませんが、平成31年度の公開研究会（6月）では上述の研究成果と平成30年度の研究成果を合わせて発表しますので、ご参会くださいますようお願いいたします。

## 附属小学校から

附属小学校 櫻 澤 直 明

附属小学校では、「未来を拓く子どもの育成」を研究主題に掲げています。2年次となる本年度は、副主題を「子どもが学びの自覚をする授業改善」と設定し、これからの教育で求められる資質・能力の育成に向けた教育研究を進めてきました。教科等の問題解決的な学習において、子どもが学んだことを問い直すことができるように、子どもが「学びの自覚」をする時や、その内容について明らかにするとともに、具体的な学習指導の工夫を行ってきました。学部の先生方のご協力や、県教育委員会指導主事の先生方のご指導をいただきながら、各教科等部による提案授業（計12回）及び部内授業（計16回）を通して、研究の検証と再考を繰り返してきました。研究の成果については、来年度の公開研究会（6月8日・9日）で発表いたします。

また、本年度は、教育に関する有識者をお招きし、本校教員及び県内の教育関係者を対象にした「夏季教育講演会」を開催しました。学校や教科等におけるグランドデザインや授業づくり等についてご講演いただき、参会者一同、日々の教育実践を振り返ったり、今後の単元・題材構想及び授業構想のヒントを得たりするなど、自己研鑽の機会となりました。

今後も、本校の研究や教育活動の成果を地域に広めたり、共に学ぶ機会を設定して日々の教育の向上を目指したりするなど、より実践的な研究や取組等を進めていきたいと考えています。



理科の提案授業の様子

## 報 告

### 附属中学校から

附属中学校 加 瀬 健

本校では、今年度は研究主題「強くしなやかに創造する力の育成～問題解決を促す協働・創造学習～」の2年次とし、これからの予測困難な社会を生き抜いていくために「新たな価値を創造する力」が重要であると考えています。そこで「創造」するために必要な資質・能力の育成を目指し、授業実践を進めてきました。

そこで、各教科・領域等における「創造」するために必要な資質・能力を具体的に設定し、教科ごとに連携を図り、授業改善に取り組みました。また、それらの資質・能力を育成するための具体的な手だてを「協働・創造学習」とし、授業に意図的に盛り込んでいくことでより効果的に資質・能力を育む方策の検討を行ってきました。

各教科・領域等において、「創造」に必要な資質・能力を具体化し、設定したことで、学習内容との関連を意識して、具体的な手だてを講じることができました。それにより、各教科の授業のみならず、学校生活全般において、生徒が主体的に学習に取り組む姿が多く見られました。また、仲間と協働しながら物事を多視点的に捉えたり、そこから「創造」された自らの考えを論理的に表現したりする姿が見られました。

9月に開催した公開研究会では、文部科学省初等中等教育局教育課程課主任視学官の清原洋一先生や教科調査官の浅見哲也先生にご講演いただき、新しい学習指導要領の実施に向けて、「社会に開かれた教育課程」の実現や「特別の教科 道徳」の評価と指導についてご指導いただきました。また、各教科に加えて道徳や学活、学校保健についてもそれぞれに主題を設定し、継続的に実践を行った様子の発表を行いました。600名を超える多くの参加者に恵まれ、たくさんのご意見をいただくことができました。

中学校で行われる平成33年度の新しい学習指導要領の全面実施に向け、今年度の課題や反省を基に計画的・継続的に研究を重ねていこうと考えています。今後、県内中学校のモデルとなるべく、さらなる授業改善を推進していきたいと思えます。

### 附属特別支援学校から

附属特別支援学校 三 澤 哲 彦

本校は、平成28年度より「人とかがわりながら学びを深める児童生徒の育成」を研究主題とし、「交流及び共同学習」「地域との連携・協働」を研究上の中軸に据えた実践に取り組んでいます。

研究においては、一人一人の子どもが、他者とかがわり合いながら「学習のねらい」に迫る授業を一層確かにすることを目指し、『共に学ぶ』『確かな学びを得る』授業づくり」として、授業づくりの過程を整理しました。そして、この授業づくりの過程に基づき、子ども一人一人の教育的ニーズと発達の段階に応じた学びの場において、授業を構想、実践、評価することに取り組んできました。

6月に開催した公開研究会では、小・中・高の各々が2授業ずつ公開しました。小学部は、校舎を共有する附属小学校との交流及び共同学習において、同学年・同年代の両校児童が、かがわり合いながら共に教科の学びを得ることを目指した、図画工作科と国語科の授業を公開しました。中学部は、学びの場を地域へ広げ、地域の人とかがわることで考えるきっかけを得ながら主体的に学ぶことを目指した保健体育科と作業学習の授業を公開しました。高等部は、学校周辺地域の人々と連携・協働を図る中で、生徒が自ら考え、身に付けた力を発揮することを目指した作業学習を2授業公開しました。

実践をとおして、以下の3つの成果を確かめることができました。

『共に学ぶ』『確かな学びを得る』授業づくりの過程」に基づくことで、相手校や地域の人と共に授業を構想、実践、評価することができるようになってきたこと。

観点別に設定した評価規準を授業づくりと授業改善に位置付けることで、交流の側面とともに教科等のねらいを達成することを目的とする共同学習の側面を充実させることができつつあること。

附属小の児童や教師、地域の人々が本校への理解を深め、積極的に提案や評価を行うようになってきたこと。

今後は、授業づくりの配慮事項を明らかにしてより確かに授業を実践できるようにすること、そして、相手校や地域との関係を深め、生かして子どもが一層社会参加に向かう教育課程を編成、実施することを目指します。

## ● 報 告

## 今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的なFD活動の推進

教員養成FDセンター長 吉田浩之

2006年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方懇」の中では、「教職課程が専門職業人たる教員養成を目的とするという認識が大学教員の間に共有されていない、教員の研究領域の専門性に偏した授業が多い、学校現場が抱える課題に必ずしも十分に対応していない」等の問題が指摘されました。また、国立大学法人の第1期中期目標期間終了を踏まえ、2009年6月5日の文部科学大臣が決定した「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」では、「附属学校園は学部・研究科等における教育に関する研究に組織的に協力すること」が強く勧告されています。このような背景を受け、本学教育学部では、当時の運営委員会が、教育学部教員の実践的指導力をさらに向上させるべく教育学部教員に適したFDプログラムを組織的に実行できるセンターの開設に努力し、2011年4月から「教員養成FDセンター（以下、「FDセンター」）がスタートしました。

その後も大学教育改革、特に教員養成学部についての提言が次々と出されています。例えば、2013年5月の教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」では、「初等中等教育を担う教員の質の向上のため、教員養成大学・学部については、量的整備から質的充実への転換を図る観点から、各大学の実態を踏まえつつ、学校現場での指導経験のある大学教員の採用増、実践型のカリキュラムへの転換、組織編成の抜本的な見直し・強化を強力に推進する。学生の学校現場でのボランティア活動を推進する等、大学と学校現場との連携を強化する。文部科学省は今後行われる小学校教員免許の改訂や大学院の教職大学院化に伴い、附属学校園との連携による積極的な研修を通じた教育実践的な教員を強く求める。」等が提言されました。

さらに、2017年8月の国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」の報告書では、「大学教員についての対応策」の中で早急に対応すべきこととして、「国立教員養成大学・学部において、研究者教員が一定期間、学校現場での教育実践研究の経験を積むことや、学校現場との共同研究を実施すること等について、時期や比率等に関する目標値を設定し達成状況をチェックすること等、教員養成分野の大学教員として必要な資質・能力を向上できる仕組みを整備することにより、実際の学校現場における教育活動と教育学を融合できる大学教員を確実に増やすこと。」が示されています。

また、群馬大学中期計画（第三期）の「教育学部のアクションプラン」でも、FDセンターに関する計画として「FDセンターを活用して、研究者教員が学校現場での指導を経験するためのFDについて検討する。（2016年度）」ことが明記され、本年度（2017年度）は「FDセンターを活用して、研究者教員が学校現場での指導を経験するためのFDについて試行する。」とされています。

このような提言等からは、教員養成分野の大学教員として学校現場における教育活動と教育学を融合できる資質・能力及び実践力の向上に資する大学と附属学校園の連携による積極的な研修の実施が求められていることがうかがえます。一方で、上記で求められているような研修に該当する機会は、学部・附属学校園が連携する活動の中に、すでに少なからずみられます。たとえば、附属学校園の公開研究会や教育実習、学部教員による附属学校の児童生徒への授業や教員への校内研修等です。そこで、それらにFDの視点で大学教員が参加し、自らの教育内容・方法や教育実践に資する学びや気づき等を記録・報告する仕組みをつくることで、実践的なFDの機会になるよう、事業計画を構想しました。

本年度は、そのようなFD活動を推進し、結果としてFD参加の報告書数は、110件となりました。今後は、本年度の取組の一層の推進と充実を図り、学部教員が附属学校園を日常的に訪問することや附属学校園で授業することが当たり前の光景になることに、より貢献していきたいと考えています。

## ● 報 告

## 子ども総合サポートセンター 事業概要

子ども総合サポートセンター長 懸 川 武 史

## 1 研究「学びのユニバーサルデザイン（UDL）に基づく授業研究の在り方」

CAST（Center for Applied Special Technology）によるUDLの理念「子ども一人一人の学びを保障する」に基づき、授業実践を通し研究を推進する。今年度UDLのガイドライン（荒巻訳2015）をフレームワークとし、「UDLガイドライン—ぐんまモデル—」を修正した。また、モデルを元に授業デザインを行い、第5学年算数科、交流及び共同学習の図画工作科の授業を3月に公開した。

※ 公開研究会では、県内外より42名が参加した。

## 2 「電話相談」、「来所相談」 ※平成29年度支援ケース数 電話12名 来所19名

県内の障害のある幼児とその保護者、学級で不適応を起こしている幼児児童生徒とその保護者を対象とした、電話相談や来所相談を行う。

## 3 「訪問相談」 ※平成29年度支援ケース数：11学校園訪問，79名

県内の様々な課題を抱える幼児児童生徒とその学校園の依頼に応じて、学校経営アドバイザー（附属小学校スタッフ）と特別支援教育コーディネーター（附属特別支援学校スタッフ）の2名、を原則とし、必要に応じて大学のスタッフを加えて学校園を訪問する。

※ 2ケースについては、関係職員によるケース会議を行った。

## 4 「研修支援」

県内の教育関係者を対象とした、公開研究会の開催や、研修講師の派遣、検査器具の貸し出し等のそれぞれのニーズに応じた研修の機会を提供する。

※平成29年度事例検討型ワークショップ2回（公開）に教育関係者等のべ18人が参加した。

※特別支援学校公開研究会にて、ポスター発表を行った。

※渋川市内中学校にてUDLについての授業参観、校内研修に講師として2名を派遣した。

※前橋市内小学校、特別支援学校にて、2授業を公開した。

## 5 個別・グループ・集団指導（年間10回開催）

県内の小・中学校に在籍する特別な配慮を必要とする児童生徒とその保護者を対象に、指導、支援を行う。また、そこで見られた児童生徒の様子を基に、センター・在籍校・保護者の三者が在籍校や家庭でのよりよい支援について検討していく。

※ 保護者・在籍校担任等研修会（1回 開催）で、群馬県総合教育センター特別支援研究係長 岡田明子先生よりご講演をいただいた。

## 6 諸検査の実施 ※平成29年度支援ケース数：2名

県内の様々な課題を抱える幼児児童生徒の保護者からの要望に対して、諸検査等によるアセスメントと、エビデンスを基にした対応を検討していく。

## 7 「ケース会議の進め方マニュアル」 3月 作成（平成30年度、データ化したものをHPで公開）

## 8 平成29年度事業「報告書」 3月 作成（平成30年度、DVDで配付）

## ● 報 告

## 附属小学校における取組 ～提案授業・授業研究会～

学部・附属学校共同研究センター長 上 條 隆

附属小学校では、各教科等部の研究方向に沿った提案授業を実践・公開し、各教科等部の研究妥当性・有効性について、その授業事実を基に討議することにより、研究の具体化及び一人一人の教員の授業力向上に資することを目的に、11月中旬から1月下旬にかけて提案授業及び授業研究会を実施している。

各教科等部の研究の方向及び授業研究会の深化に寄与できるよう、附属小学校における提案授業・授業研究会に、以下のセンター運営委員、あるいは、各教科等部の研究協力者の学部教員が参加した。

## 〈提案授業 参加者一覧〉

役 職	職 員 名	日 時	備 考
教育学部 教 授	江森 英世 先生	平成29年11月14日(火)	数 学 科 研 究
大 学 院 教 授	懸川 武史 先生	平成29年11月14日(火)	総合的な学習の研究
教育学研究科 大 学 院 教 授	懸川 武史 先生	平成29年11月21日(火)	生 活 科 研 究
教育学研究科 教育学部 教 授	上里 京子 先生	平成29年11月21日(火)	家 庭 科 研 究
教育学部 教 授	吉田 秀文 先生	平成29年12月 4日(月)	音 楽 科 研 究
教育学部 准教授	濱田 秀行 先生	平成29年12月 4日(月)	国 語 科 研 究
教育学部 准教授	鬼澤 陽子 先生	平成29年12月 8日(金)	体 育 科 研 究
教育学部 教 授	益田 裕充 先生	平成29年12月 8日(金)	理 科 研 究
教育学部 教 授	郡司 明子 先生	平成30年 1月18日(木)	図画工作科研究
教育学部 准教授	宮崎 沙織 先生	平成30年 1月18日(木)	社 会 科 研 究
大 学 院 教 授	山崎 雄介 先生	平成30年 1月29日(月)	道 徳 科 研 究
教育学研究科 教育学部 教 授	上原 景子 先生	平成30年 1月29日(月)	英 語 科 研 究

- 提案授業は、5校時または6校時（45分間を原則）とする。
- 授業研究会は、授業を実施した日の16:30から行う。
- 授業研究会は、120分とし、その内容は、次の時間を目安とする。
  - ・ 研究の方向及び授業説明……………20分間
  - ・ 質 疑……………20分間
  - ・ 討 議……………65分間
  - ・ 指導講評……………15分間



平成29年12月4日(月)  
国語科研究授業の様子

## ● 報 告

## 現職教員の成長を促す温かな学び合いの場

教育実習・実践開発部門 黒羽正見

平成29年度の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2017」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」が、次の日程・内容の通り行われました。延べ参加人数は101名でした。今年度も教員一人ひとりの問題意識に支えられた、温かいつながりのある学び合いができました。大学の先生方の理論知を積極的に自分の実践知に取り入れようと真剣に耳を傾けているまなざしの中に、学び続ける教師像の本質を見取ることができました。そのような真摯な姿勢で参加された先生方に、改めてお礼申し上げます。

## 2017 現代的学校教育課題解決シリーズ日程

## 学び合う仲間による教員研修リレー講座

講座日	担当/所属/専門分野	内容
第1回講座 5月13日	13:30~15:00 (常葉大学) 堀井啓幸 教授/教育経営	アクティブ・ラーニングを活かす教育環境 —教育空間と学習活動—
第2回講座 5月27日	13:30~15:00 (群馬大学) 岩瀧大樹 准教授/臨床心理学	学校教育相談に活かす認知行動療法のエッセンス I —問題の理解とケースフォーミュレーション—
第3回講座 6月3日	13:30~15:00 (金沢学院大学) 小林淳一 准教授/学校教育学	子どもに伝える学習の意味 —知識活用法を学ぶ—
第4回講座 6月7日	13:30~15:00 (東京学芸大学) 佐々木幸寿 教授/教育行政学	実践ニーズに対応した学校法規の運用 —判例を使って学ぶ—
第5回講座 7月1日	13:30~15:00 (群馬大学) 吉田浩之 准教授/生徒指導	いじめ対応に関する組織的取組の最新動向
第6回講座 7月15日	13:30~15:00 (上越教育大学大学院) 松井千鶴子 教授/総合的な学習	教育課程と授業をつなぐカリキュラム・マネジメント
第7回講座 10月14日	13:30~15:00 (群馬大学) 深谷達史 准教授/教育心理学	コンピテンシーを育む学習支援 —心理学の視点から—
第8回講座 10月21日	13:30~15:00 (群馬大学) 霜田浩信 教授/障害児心理学	気持ちや行動が荒れやすい発達障害児へのサポート
第9回講座 11月11日	13:30~15:00 (愛知教育大学) 野平慎二 教授/教育哲学	これからの時代の子どものたちと創る道徳教育
第10回講座 11月25日	13:30~15:00 (群馬大学) 黒羽正見 教授/教師教育	道徳教育と教師 —道徳授業の難しさ—

ここで、各講座に参加した先生方の感想を紹介させていただきます。

- ・学習に関するさまざまな研究知見があることを知るとともに、それらを学習場面に活用することで、効果的に学習活動を進めていくことができることがわかりました。具体的例をあげての講義だったので、とてもわかりやすく、普段の学習指導をふりかえる機会になりました。
- ・知に対する教師のあり方、とらえ方の視点について、深く考えていかなければならないと思いました。明日から、「はっきり、わかりやすく、間を大切に」から始めたいと思います。
- ・学校現場では、十分に認識しておく内容でありながら、初めて知ることが多く、知識として理解しておくべきだと感じました。
- ・遠方からの参加で、午後の開始はありがたく、時間が短く感じる講座をありがとうございました。もっと勉強しなければならぬと思いました。関連する講義があれば受講したいと思います。
- ・いじめ防止対策推進法によって、学校の対応のあり方が大きく変化しているので、危機感を持ちました。
- ・発達障害を抱える子どもを担当するクラス担任で悩んでいる教員がたくさんいます。本日のような講義に、より多くの教員に参加してもらい、研修の機会が得られればと強く感じました。
- ・具体的にわかりやすい説明をしていただき、学校現場における課題対応や支援がイメージできました。また、発達障害と思われる子どもの保護者への対応で悩むことがあります。今度は、そのような事例への対応についても勉強したいです。

学校現場の実情とは関係なく、矢継ぎ早にもたらされる国のさまざまな施策により、教職の専門性開発の中心である「教員仲間同士」で学び合う校内研修は衰退・形骸化を余儀なくされています。だからこそ、先輩教員が若手教員の授業実践を臨床的に指導する「授業研究を継承する文化」を維持していく必要があります。今の学校教育に対する自身の問題意識を大切に共々に学び合い、高め合ながら、今日の教師受難の時代一緒に乗り越えていきませんか。平成30年度も先生方の主体的な参加をお待ちしています。



## ● 報 告

## 教育臨床心理部門の取組

教育臨床心理部門 岩 瀧 大 樹

## ○ 教育臨床事例検討会 ～2017年度の取り組み～

教育臨床心理部門が開催する「教育臨床事例検討会」は、7年目の取り組みとなりました。今年度は登校支援員や、学習サポーターなどの心理職を仲間としてお迎えしました。今年度の特徴としては、開発的介入としてスクールカウンセラーによる構成的グループエンカウターの実践を検討したことに加え、継続的にその手法や流れなどに関し、意見交換を実施できたことがあげられます。これは、事例提供者だけではなく、参加者にとっても、自身の実践の場での導入や活用につながり、大変有意義な機会となりました。各回の概要は下記のとおりです。

## 2017年度の教育臨床事例検討会の活動

回	実施日	時 間	事例提供者	事 例	参加者
1	2017年 5月30日 (火)	19:30～21:00	参加メンバーによるグループワーク	年度当初における学校の支援とアセスメントについて	5名
2	2017年 6月27日 (火)	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー 県内公立学校生徒指導嘱託員	スクールカウンセラーと生徒指導嘱託員とで連携した中学校における学校教育相談実践事例	7名
3	2017年 7月25日 (火)	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	スクールカウンセラーによる構成的グループエンカウターの可能性を考案する II	5名
4	2017年 9月26日 (火)	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	不登校きょうだいへのスクールカウンセラーによる支援	9名
5	2017年10月31日 (火)	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	スクールカウンセラーによる構成的グループエンカウターの可能性を考案する III	8名
6	2017年11月28日 (火)	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	発達障害を抱える中1と小6の不登校きょうだいと母親の支援	10名
7	2018年 1月30日 (火)	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	スクールカウンセラーによる構成的グループエンカウターの可能性を考案する IV	6名
8	2018年 2月28日 (火)	19:30～21:00	参加メンバーによるグループワーク	2017年度のスクールカウンセリングを振り返る	7名
9	2018年 3月 (火)	19:30～21:00	検討中		-

2018年1月時点での報告とする。

## ○ 体験的科目における地域貢献

2017年10月21日(土)～22日(日)の1泊2日で、国立赤城青少年交流の家のイベントである、「秋のアウトドアフェスタ」に2年生男子42名・女子32名の合計74名が参加し、企画・運営のサポートを実施しました。当日は台風21号の接近により、野外でのイベントはすべて屋内に変更になるとともに、来場者数も例年より限られている状況でしたが、学生たちは自主的に考え、検討し、協力しながら子どもたちとのふれ合いに取り組むことができました。下記に参加者の感想(一部抜粋)とその様子を紹介します。

## 「秋のアウトドアフェスタに参加して」

## 教育学部 2年生男子学生

子どもと関わる前に、指導者の準備が非常に多いことに気づきました。特に危険の予測は重要で、子どもの安全の確保は不可欠だと感じました。その際、必要なのは子どもの視線に立った想像力だと思いますが、まだまだ自分には不足していることを痛感しました。指導者がかつべき、視野の広さに気づくことができました。

また、9月の事前合宿で、メンバー同士の意思疎通や円滑なコミュニケーションについて体得したことを、今回に活かすことができました。これらの体験で学んだことを、教師として実践できるよう、今後も意識していきたいと思っています。



## ● 報 告

## 群馬大学教育実践研究35号発行のお知らせ

紀要編集委員長 田 中 麻 里

群馬大学教育実践研究は、今年もCDに保存した電子データでの配布となります。紙媒体のよいところは、机の上に置いておくだけで、冊子の内容が、表紙の執筆者・題目一覧等から見えてくるところです。ただCDに保存し配布した場合には、その表紙すら人目に付かないということも生じてきます。そこで、このニュースレターのお場をお借りして、35号の題目ならびに代表執筆者の一覧を掲示いたします。これと思った論文がありましたら、配布しましたCDまたは大学HPを開いて関心のある論文を読んでいただけたら幸いです。

題 目	代 表 著 者
小学校社会科における地域分析による“位置や空間的な広がり”の視座の構造化ー群馬県板倉町と嬭恋村を事例とした単元開発ー	宮崎沙織・青山雅史・関戸明子
課題の追究を通して世界の自然環境を大観する社会科導入学習	中尾敏朗
群馬大学教育学部海外インターンシップについてー在外日本人学校および海外協定校での教育実践ー	伊藤 隆・今井就稔・新井淑弘・任 龍在・上原景子・菅生千穂
実験室内で完結する緑葉の同化デンプン検出方法の確立ーシロツメクサを材料としてー	佐野(熊谷) 史・川瀬未莉・北爪麻子
中学校理科で学習する水溶液に関連した授業実践	岸岡真也
教科書に記載された情報を用いた脊椎動物の仲間のつながりに関する考察	佐藤 綾・江積翔太・柏木 純・佐野 史・栗原淳一
地域ニーズに応じた音楽科改革の一事例ーアダムス州立大学に見る教育実践ー	菅生千穂
中学校音楽科における「表現すること」の気づきーオペラ作品を使った事例的検討ー	山崎法子・西形茉莉
インクルーシブアート教育システム構築のための覚え書き 第3報	茂木一司
美術科デザイン分野の学習における『協動的な学び』の考察ー教育学部生のワークショップ用什器制作を通してー	茂木克浩・齋江貴志
子どもの生活をより豊かにするアート活動の考察ー地域に向けたBFAプロジェクトはいかに始まったかー	郡司明子・宮川沙織・上原康央・福島 直・石原加奈子・毛塚鮎美・岡本麻衣
中学校美術科における発想を高めるための表現活動に関する一考察	喜多村徹雄
美術史授業における理論・鑑賞と実技・表現の往還を目的とした「公的な落書き」とシュルレアリスム理論の学修ー教員養成学部での実践と小学校図画工作科・中学校美術科への展開の可能性ー	春原史寛
教員養成大学学生の「体育」認識について考えるー小学校教科専門の授業を通してー	福地豊樹・中雄勇人
はじめての表現運動の授業づくり：学習指導に対する苦手意識と授業実践状況をふまえて	木山慶子・石井里佳
Residents' responses regarding the flood in Chiang Mai (Thailand and needs of education for) and needs of education for disaster reduction	Phaphorn CHAIMUK・Mari TANAKA
小学校家庭科における協働的問題解決を取り入れた布を用いたものづくり学習	中里真一・小林陽子・前田亜紀子
レイモンド・カーヴァーの「大聖堂」を授業で読む	宮本 文
高等教育機関における手話通訳者の養成に関する課題ー大学生が全国手話通訳統一試験受験資格を取得するための課題ー	二神麗子・金澤貴之・中野聡子
合理的配慮提供時における合意形成についての検討	倉林 正・霜田浩信・丹野哲也
知的障害のある子どもと障害のない子どもとの教科学習における交流及び共同学習の展開ー特別支援学校小学部・小学校国語科における単元「きいてはなしてつたえよう」の実践からー	三澤哲彦・早川愛美・近藤 智・木村素子 霜田浩信・河内昭浩・坂西秀昭・今井 東
アイヌ文化学習の論理と展望ー北海道白糠町の事例を通してー	新藤 慶
授業における説明をわかりにくくする要因	佐藤浩一
小学校第3学年における児童のコミュニケーションを促す指導ー学習の転移と学級風土づくりを通してー	木村裕子・佐藤浩一・武井英昭・田村 充
小学校第4学年において説明文の作文を促す指導ー認知心理学からのアプローチー	辻本正幸・佐藤浩一・武井英昭・田村 充
「道徳科」における道徳教育デザインの検討ー学習プロセスによる教育実践を通してー	橋本麻理香・音山若穂・懸川武史
中学校音楽科「木管五重奏」の教材化	大須賀真理・佐藤美咲・立花彩香・宮澤侑里・柳田智子・菅生千穂・矢島 正
教職大学院実務家教員による研修支援の成果ー教員研修センター事業関係者への聞き取りをもとにー	矢島 正
小学校社会科における思考力を育成する学習指導ー思考ツールを活用した言語活動の充実を通してー	吉野章子・山口陽弘・石川克博
思考力・判断力・表現力を育む中学校社会科学習指導ー協同学習と学習方略の活用を通してー	菊地真真・山口陽弘・石川克博
ファシリテーション技法を活用した小学校学級活動の指導法に関する一実践	阿由葉恭代・懸川武史・音山若穂
効果的な交流を生み出す学習の在り方	田村 充
コミュニティ・スクールの仕組みをいかした自校の課題解決に関する実践的研究	本川真晴・高橋 望
児童の「気づき」を促進する生活科指導法の工夫	大島みずき・岡本梨恵子・音山若穂・懸川武史
図画工作科におけるインクルーシブ教育システムの構築についてー交流及び共同学習の実践を基にー	中原靖友・豊岡大画
心理的居場所感が対人ストレスコーピングに与える影響ー青年期のシャイネスに注目してー	渡邊美咲・岩瀧大樹・山崎洋史
青年期の昇進意欲尺度作成の試みー男女差に着目してー	渡邊洋子・岩瀧大樹・山崎洋史

## ● 報 告

## センター協議会・資料室利用状況

教育臨床心理部門 岩 瀧 大 樹

## ■国立大学教育実践研究関連センター協議会への参加加

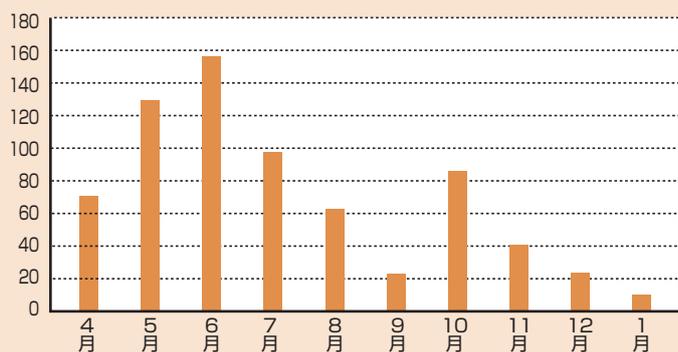
平成30年2月16日(金)に、東京学芸大学で実施された第92回国立大学教育実践研究関連センター(以下センター)協議会に参加いたしました。本協議会は年に2回開催されますが、今年度は特に45年を超えたことから、冒頭に本協議会会長より草創期のお話をうかがうことができました。教員養成へのコンピューター導入の観点から教育工学が中核となったのが嚆矢であったこと、引き続き教育実習を基にした教員養成に関わる実践の蓄積に着眼したこと、そして学校不適應などに対する社会のニーズに学校として関わるべく臨床心理学からの介入を検討するようになったことなどをうかがい、現在に至るまでの経緯を振り返る機会となりました。また、これらの実践が加入している各大学の特色を活かしつつ、今日まで多くの研究や実践が継続されているとのお話もありました。

各部門からの報告においては、教育臨床部門からはセンターとしての取り組みを第50回日本カウンセリング学会、第55回日本特殊教育学会での自主シンポジウムなどにより発信していることが発表されました。また、今後の課題として、学部とは異なる「出島」的な見地から教育学と臨床心理学との融合があげられるとともに、広い職域に貢献できる人材育成として公認心理師などの養成に関しても提言がありました。教育実践・教師教育部門からは、教職大学院などの最新の教師教育に関して先進機関での取り組みが紹介されるとともに、各大学から平成29年8月に回収されたアンケートの整理が進行中であることが伝えられました。さらに、教育工学・情報教育部門からは、センターと学部との連携の仕方について特にプログラミングの観点から提言があり、新学習指導要領に対応しつつ、プログラミングに関しては、センターが一任されるのではなく、学部と相談する立場での関わりの重要性が報告されました。



また、東北大学大学院教授 堀田龍也先生より、「新学習指導要領の実現に向けた教員養成大学及びセンター協議会への期待—教育の情報化の観点からの実践的・学術的寄与への要請—」としてご講演を拝聴しました。学習指導要領の変遷を振り返り、育てるべき人間像の常なる変化、特に「多様性」への対応の重視、基礎的な資質・能力の育成に関わるICTの活用などについて考察を深めることができました。

2017年度月別資料室貸出数(冊)



注：2018年1月現在

## ■センター資料室の利用状況

本センターでは、県内小中学校で使用されている教科書・教師用指導書などとともに、各学生が教育実習で作成した学習指導案などを実習校毎にプールしております。今年度は特に6月の貸出数が多くなっておりませんが、実習生が事前準備を着々と進めていた様子が読み取れます。

## ● 報 告

## 次年度へ向けた取組の紹介

教育実習・実践開発部門 黒羽正見

■平成30年の「現代的学校教育の課題解決シリーズ2018」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」の事業内容が、下記の通り決まりました。リレー講座の詳細については、各学校へ案内ポスターを配布し、当センターのホームページでも掲載しています。多数の参加をお待ちしております。

## 2018 現代的学校教育課題解決シリーズ日程

## 学び合う仲間による教員研修リレー講座

講座日	担当/所属/専門分野	内 容
第1回講座 5月12日	13:30~15:00 (常葉大学) 堀井啓幸 教授/教育経営	2030年の学校教育をみすえた学校と学びを考える
第2回講座 5月26日	13:30~15:00 (群馬大学) 岩瀧大樹 准教授/臨床心理学	学校教育相談に活かす認知行動療法のエッセンスⅡ —改めてソーシャルスキルを多面的に見直す—
第3回講座 6月16日	13:30~15:00 (東京学芸大学) 佐々木幸寿 教授/教育行政学	学校運営のための学校法務 —弁護士への対応と活用—
第4回講座 6月30日	13:30~15:00 (金沢学院大学) 小林淳一 准教授/学校教育学	新学習指導要領にみる教師の新しい役割
第5回講座 7月7日	13:30~15:00 (群馬大学) 吉田浩之 准教授/生徒指導	いじめ対応に関する組織的取組の最新動向
第6回講座 7月21日	13:30~15:00 (富山大学) 笹田茂樹 教授/教育行政学	開かれた学校づくりの現状と課題
第7回講座 10月20日	13:30~15:00 (群馬大学) 霜田浩信 教授/障害児心理学	気持ちや行動が荒れやすい発達障害児へのサポート
第8回講座 10月27日	13:30~15:00 (群馬大学) 黒羽正見 教授/教師教育	道徳授業実践の方法と課題 —道徳性の育成に着目して—
第9回講座 11月10日	13:30~15:00 (宇都宮大学) 久保田善彦 教授/理科教育	これならできるプログラミング教育
第10回講座 11月17日	13:30~15:00 (群馬大学) 上原景子 教授/英語教育	英語教育における 小・中・高の接続と「話す力」の育成

## ■群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センター

附属学校教育臨床総合センターには、現職教員に群馬大学の施設・設備・教員を有効に活用してもらい、実践的指導力を高める「学校ニーズに応じたオーダーメイド」の研修・研究制度があります。平成30年度も4月から以下のように教育研修員・研究協力員制度をスタートさせます。大学の研究知と学校現場の実践知の往還・統合を図りながら、現職教員の資質能力の向上と学校組織の開発をめざしていく協働的支援活動です。

## ○長期研修院における教育研修員・研究員の募集

大学の研究知と学校現場の実践知の往還・統合を図りながら、現職教員の資質能力の向上と学校組織の開発をめざした協働的支援活動です。本年度の募集は、教育研修員・研究協力員ともに平成30年度4月2日(月)より随時受け付けます。群馬県内外の先生方による教育研修・教育研究に際して、学校教育臨床総合センターが多少なりともお役に立てれば幸いです。

## ○学校経営サロンのお誘い

このサロンは、現職学校教員と大学教員が学校経営について、日頃考えていること、感じていること等をざっくばらんに語る場です。日々の教育実践あるいは実践をしていく中で感じる疑問など、大学教員とともに語り合いませんか。若手、中堅教員の参加を歓迎します。この自由な語り合いを通して、参加者一人ひとりが少しでも成長できたらいいですね。

教育研修員・研究協力員の応募方法及び学校経営サロンへの参加の詳細については、当センターのホームページをご覧ください。

## 群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センターニュース第6号

発行日：平成30(2018)年3月

発行所：国立大学法人群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

〒371-8510 前橋市荒牧町四丁目2番地 TEL 027-220-7385 FAX 027-220-7381

URL <http://center.edu.gunma-u.ac.jp>